

じやくみち

…被災地支援情報…

第89号 発行日 2007.12.26
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel : 078-574-0701 fax : 078-574-0702
URL <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>
e-mail ngo@pure.ne.jp
口座番号 : 01180-6-68556 (郵便振替)

子どもたちの子どもたちの子どもたちのために

代表 村井雅清

月並みな表現になりますが、2007年もあと指折り数えるほどになりました。今年1年を振り返ると、厳しい年であったにもかかわらず、みなさまには相変わらずのご支援を頂きました。心よりお礼を申し上げます。気がついたら、この13年に渡って途絶えることなく私どもを支え続けてくださっている方々の多さに驚きを隠せないのですが、ほんとに感謝を致します。本来ならばお一人おひとりのお名前をご紹介し、丁寧にお礼を申し上げなければならぬのですが、このような略式でのお礼になりますことをお許しください。

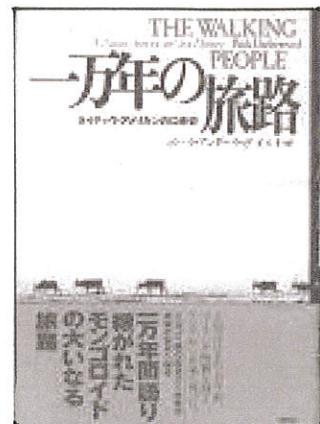
ところで、今年は特に先日のCOP13などの話題に関連して、地球温暖化による災害時の被害の増大や複雑化が益々気になるところです。全国の小さな自主防災や災害ボランティアの会などから、災害に対する事前の備えについての講演の依頼を頂きます。3年ほど前から、政府は「国民的減災運動」という枠組みをつくり、全国に呼びかけがなされていますが、まだまだ減災に対する意識が薄いというのが現状のようです。頭では充分理解されているのですが、何故か行動に移せない、成果が形に現れないなどの現象が社会全体には充満しているというのが実態のようです。

私も講演やワークショップなどを通じ

て国内外での体験や見聞したことを話すのですが、正直いって、「これで、ほんとに実態が変わるのだろうか?」と不安になることが多いのです。

そのような時に、以前出会った『一万年の旅路』(*)という本を開くと、これでいいのだ!という勇気が湧いてきます。1万年前から歩き続け、今もネイティブ・アメリカンであるイロコイ族として存在し続けている秘密がどこにあるのか?この本を読んでいると、答えがでてきます。内容を簡単に紹介すると、①行き詰まつら立ち止まってみんなで考える、②全員の合意形成が成立するまで学ぶ、③最後の指示を一族の長老(女性)に仰ぐというこの3つを守り抜くことで、イロコイ族は絶滅せずに生き延びて来られたのです。長い旅の行程には、何度も天変地異やまた他の生きものとの衝突による一族の危機にも遭遇してきたでしょう。にもかかわらず生き延びてきたのです。長老の女性(おさびと)は、いつも、「子どもたちの子どもたちのために」どうすればいいのか学ぼうと声をかけています。

新たな年を迎えるにあたり、あらためてこの原点のようなメッセージを胸に刻みながら、今年の1年を閉じていきたいと思います。



*『一万年の旅路—ネイティブ・アメリカンの口承史』(ポーラ・アンダーウッド著、星川淳訳、翔泳社 1998年5月25日初版)



「中越・KOBE足湯隊」大活躍!!

KOBEから中越、そして能登へ

足湯ボランティアは足湯を通じて被災者の体と心にそっと触れ、その会話の中で耳を傾け、ふと口からこぼれる、困っていることや必要としていること-それを"つぶやき"と呼んでいますーを聴いていく。そのつぶやきを行政や専門家に橋渡しをしていく、また集会所などを利用して行うことで人の集まる場を作るという役割もあります。1995年に発生した阪神・淡路大震災の被災地において行われ、その後2004年に発生した中越地震の被災地においても引き継がれ行われました。

3月25日、能登半島沖の日本海で震度6強の地震が発生しました。消防庁の発表によるところこの地震により死者1人、重軽傷者356人、全壊家屋684棟、半壊・一部損壊家屋28,645棟（11月28日現在）などの大きな被害がありました。

この能登半島地震に対して、神戸大学を中心に以前からネットワークがあった神戸学院大学、大阪大学などのボランティアグループの学生たちが地震発生直後の3月29、30日に能登の被災地の避難所に入り被災の方々に足湯を行いました。この足湯ボランティアのKOBE、中越からのリレーのつながりから

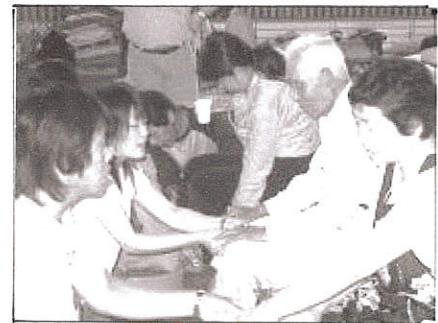
「中越・KOBE足湯隊」と名付けられ活動を開始しました。この活動に中越復興市民会議、被災地NGO協働センター、日本災害救援ボランティアネットワーク他の団体が学生たちの活動を後押しをしています。



能登半島地震で被害を受けた家屋



避難所での足湯の様子（4月）



刈羽村の避難所での足湯（7月）

能登の“宝物”をKOBEで展示

5月には2トントラックで門前町鹿磯集落に行き、その廃材置き場から地震で取り壊してしまった家の柱や下敷きになっていた家財道具や生活雑貨の一部を頂いてきました。それら地域独特の伝統民家を支えてきた柱や、ついこの前まで暮らしの中で振る舞っていたタンスや火鉢やミシン、輪島塗のお重箱、能登の海で使われていた網や釣り竿など1つひとつには生活の臭いがありました。この“宝物”を少しでも多くの人に見てもらって被災した能登を伝えようと、6月3日に、阪神・淡路大震災後から13回目となる地域のお祭り「灘チャレンジ」において展示を行い、地震の被害を伝えるパネル展示、募金活動も行いました。また神戸学院大学でも「能登半島地震の瓦礫展」と題して展示が行いました。

発生直後の中越沖被災地へ

7月16日に新潟県中越沖で震度6強の地震が発生しました。消防庁の発表によるとこの地震で死者15人、重軽傷者2,345人、全壊家屋1,259棟、半壊・一部損壊39,972棟（12月4日現在）などの大きな被害がありました。これを受け発生直後の7月

中越・KOBE足湯隊の活動

3/25	能登半島地震発生
3/29-30	能登半島
4/7-8	能登半島
4/29-5/5	能登半島
6/30-7/1	能登半島
7/16	中越沖地震発生
7/20-27	中越沖
8/4-5	中越沖
8/8-10	能登半島
8/22-23	高野山真言宗社会ボランティア研修参加
9/22-24	中越沖
11/23-25	能登半島、中越沖
12/22-24	能登半島

中越・KOBE足湯隊

1. 17防災未来賞

「ぼうさい甲子園」

奨励賞受賞!!

表彰式、発表会

2008年1月13日（日）

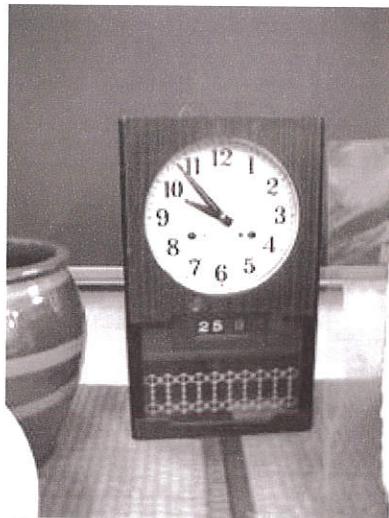
13時～ 兵庫県公館にて

道下仮設にベンチを設置

8月8、9日の第5次派遣の時には門前町道下仮設の通路に丸太を反割りにしたベンチを12台設置しました。これは以前この仮設に住むおばあちゃん達がベンチに座って自然に井戸端会議を始めていたのを見たことから、普段仮設にこもりっぱなしでなかなか外に出られない人が少しでも外に出るきっかけになったり、仮設の方々の憩いの場になればと寄贈したものです。

よりよい支援を目指して

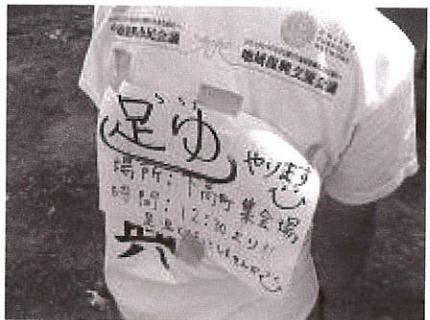
中越・KOBE足湯隊に参加した学生たちは月に一度くらいのペースでミーティングを行い、派遣後の活動報告や、地元の関係者とのやりとりを共有したり、足湯ボランティア体験の感想や反省などについて発表し合ったり、次の派遣の課題や計画を話し合ったりして情報を共有しアイディアを出し合いながら次の活動へつなげています。



能登半島地震発生の時刻で止まつたままの時計（廃材展で）

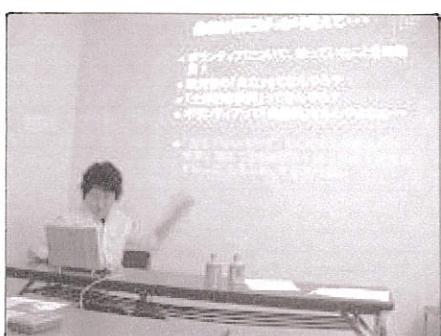
学生たち自身の足湯ボランティアについての感想文を読むと、被災者にどうしたら喜んでもらえるのか、どう話しかければ悩みを話してもらえるのかなど迷いやとまどいを感じることもあるようです。でもそういう中でも「笑顔でお礼を言ってくださった」「名前を覚えていてくださっていて嬉しかった」など、足湯という1対1の温かい

ふれあいのできる方法を用いながら、だんだんと被災者の方々との顔の見える関係を作っていく手応えを感じていているように感じます。こうした足湯ボランティアの経験の中から拾った一人ひとりのつぶやきやメンバーそれぞれの気づきや思いを共有しながら、被災者に寄り添うこと、被災地をつなぐということ、またよりよい支援とは何なのかということを考えながら活動を続けています。



12/2 中越・KOBE足湯隊主催学習会

被災地をつなぐ私たち～中越・能登・中越沖の復興支援を考える～開催



宮本匠さんの発表の様子



鈴木隆太さんの発表の様子

12月2日に中越・KOBE足湯隊が主催して2005年から中越地震の被災地に入っている大阪大学院生の宮本匠さんと、中越の被災地の支援活動を行っている中越復興市民会議のスタッフの鈴木隆太さんを講師に迎え、上記テーマで勉強会を行いました。足湯隊メンバー、関係者に加え一般からの参加もあり40人ほどが集まり2人の話を中心に会場からも活発な意見が交わされました。

宮本さんは「被災者に遊ばれるとは？」という題で、初めて被災地へ入った時のとまどいと、長く被災者とつきあう中でむしろ自分が被災した方々にお世話になり可愛がられていたことから、それまで考えていた支援のあり方というものが変わっ

ていったという体験をお話しました。

鈴木さんは「中越で学んだこと～被災者に寄り添うとは～」という題で、自分が携わっている足湯プロジェクトでの経験から足湯をただ提供するということではなく、被災者とボランティアが一緒に楽しむ関係性を作りながら動いていくことが「被災者に寄り添う」ことではないかということ。中越沖地震で初めて「揺れ体験」をしてこれまでやってきたことが根底からくつがえされる思いがした。阪神・淡路大震災の被災地に入つてからのテーマである「最後の一人まで」とは何かを改めて考え続けているとお話ししました。



震つな移動寺子屋 一減災サイクルの視点から

もう一つの社会をめざす

講師 松本誠氏

去る12月1日に震災がつなぐ全国ネットワークの移動寺子屋が松本誠さんを講師に迎え当センターにおいて行われました。兵庫県にある武庫川流域の河川行政の取り組みについて、ご自身が武庫川流域委員会の委員長を務めている経験からお話をされました。

松本さんは、1997年の河川法の大改正によって流域全体として川について考え、洪水を百パーセント封じ込めるのではなく災害と共存していく暮らし方、まちづくりを考える総合治水発想への政策転換が重要なになってきていること、その担い手として流域住民と流域自治体の参加、

参画による「流域協働管理」をする必要があること、またその合意形成にはダム建設の可否に陥りがちな議論を越えて多数決原理ではなくシナリオを持たない徹底した議論を行う討議民主主義のプロセスが重要ではないかと力説されていました。

この移動寺子屋は他に長野県、徳島県、大分県でも開かれており、一貫したテーマとして「減災サイクル」について学び深めようという趣旨であり、松本さんの思いは阪神・淡路大震災から13年経った中間総括でもあるといえます。

松本誠氏 プロフィール

元神戸新聞記者で当時からまちづくりや商業活性化、環境問題、住民運動などを勢力的に報道。その後も情報科学研究所で震災復興、まちづくり、川づくり、自治体改革、運動世論調査などで論文を発表。現在は「市民まちづくり研究所」で積極的に環境を大切にしたまちづくりを行っている。

提言(アドボカシー)・ネットワーク事業

阪神・淡路大震災から13年を迎える被災地KOBE

被災者生活再建支援法改正案成立

先日11月9日に「被災者生活再建支援法改正案」が可決され成立了。当センターもこの間被災地の復興支援に携わった経験から、様々な機会を通して望ましい法改正のあり方について提言を行ってきました。

阪神・淡路大震災発生後の1998年に全国の大きなうねりによって制定されたこの法律も、当初は住宅再建支援は先送りされました。2004年の大改正にあたって被災家屋の解体・撤去費用やローン利子補給について支給する「居住安定支援制度」の創設が認められましたが、今回の2回目の大改正で被災地住民の長年の悲願であった住宅本体の建設・購入費及び補修費

にも支給金を使用できるようになりました。(支援対象は全壊、大規模半壊家屋) 今年起きた能登半島半島、中越沖地震の被災者にも遡及適用される一方で、未だ仮設住宅の残る2004年発生の中越地震が対象外となったことが残念ですが、国の被災者生活支援は大きく一步前進したといえます。

(改正案の詳細は神戸新聞のウェブサイト内の特集記事『「復興あしたへ」被災者支援法改正 住宅建設も対象に／10年余の声「壁」崩す』をご覧下さい。 (下記アドレス)
<http://www.kobe-np.co.jp/sinsai/2002ashita/071125.html>

阪神・淡路大震災からもうすぐ13年という長い年月を感じるとともに、あちこちで見られる空き地や人通りの少ない商店街を見ると複雑な思いがします。能登の被災地で足湯隊が拾ったつぶやきからは、離れや母屋、蔵などから成る伝統民家の住まいや家の近くの畠や海岸からその家で食べる分を賄う生活を続けていたこの地域の慎ましい住まい方が見えてきます。

この度の法改正を新たな一步とし、これからもそれぞれの地域の歴史、文化、人々の住まい方、一人ひとりの生活をじっくり見据えた復興につながる支援のあり方を発信し続けていくことが大切だと考えます。

阪神・淡路大震災13周年関連イベントのご案内

●「災害メモリアルKOBE2008

未来へ語ろうわたしたちの体験
ばくたちわたしたちがみた震災
一神戸・淡路・能登・中越一」
日時：1/13(日) 10:00～17:00
場所：人と防災未来センター
・作文発表「先輩の体験に学ぶ」
・スペシャルセッション
「能登半島・中越沖地震を経験して」
・パネルディスカッション
「震災の体験を伝える
一ばくたちわたしたちチャレンジ」
問い合わせ：実行委員会事務局
TEL：078-262-5067

●「日本災害復興学会発足シンポジウム
新潟・輪島・兵庫から復興戦略を語る」
日時：1/14(祝) 13:00～16:00
場所：関西学院会館レセプションホール
・基調講演
「災害復興におけるミスト・オポチュニティーズ」
・シンポジウム
テーマ「格差時代の復興戦略を問う」
※要申込
お問い合わせ：関西学院大学災害復興
制度研究所
URL：<http://www.fukkou.net/>

●「国際防災シンポジウム2008

持続可能なコミュニティへ向けて」
日時：1/18(金) 13:00～17:00
場所：よみうり神戸ホール
第1部：「環境と防災」
基調講演「エコシステムと防災」
ジェリー・ペラスケス氏
第2部：「男女で支え合うコミュニティ防災」
基調講演「ジェンダー防災をめざして」
モーリン・フォルドハム氏
○その他講演、パネルディスカッションあり
※要申込(1/16(木) 17:00まで)
お問い合わせ：UNCRD兵庫事務所
TEL：078-262-5560

●HAT神戸+防災EXP2008オープニング記念

国際協力の新しいカタチ
～アートでむすぶ防災と国際協力～
防災寄席+パネルディスカッション
日時：1/12(土) 14:00～16:00
場所：JICA兵庫2Fブリーフィングルーム
・笑福亭鶴笑による防災寄席
・パネルディスカッション
○1/9～1/20までHAT神戸の各機関でイベント開催
※要申込
お問い合わせ：(財)兵庫国際交流協会 協力課
TEL：078-230-3263

●1.17メモリアル・コンサート

「詩と音楽と朗読の夕べ」
日時：1/17(水) 開場 18:30 開演 19:00
会場：神戸新聞松方ホール
料金：前売り ¥2,500 当日 ¥3,000
※全席自由席
・出演：竹下景子／林晶彦(ピアノ・作曲)
／名倉誠人(マリンバ)

お問い合わせ・お申し込み：しみん基金こうべ
TEL：078-230-9774

●CODE法人取得5年記念フォーラム

いのちと向き合う、くらし再建の「いま」
を見えて

日時：2/17(日) 10:00～18:00

場所：兵庫県私学会館206号室
～震災から13年、国内外の被災地現場から～
・「CODE 5年の歩み」～音と映像による報告～
・「CODEで育った若者たちの『いま』から学ぶ」
若者たちによるパネルディスカッション
・「震災から13年の歩みとCODE」
CODE理事からの発題を元に語り合い、学び合う
・「新しい市民社会とCODEの役割」
芹田健太郎氏と室崎益輝氏のトークセッション
お問い合わせ：CODE事務局
TEL：078-578-7774
※詳細については同封のチラシをご覧下さい。

刊行のご案内

Photo & Message

いとしの能登 よみがえれ！ ボランティアの能登ノート



地震に負けない笑顔

地震なんかにまけない！能登を応援したい！

・・・みんなの気持ちを乗せて

2007年3月に発生した能登半島地震。

以来、活動を続けているボランティアの手によってフォト・メッセージ『いとしの能登 よみがえれ！』は創られています。そしていよいよ完成が近づいて参りました。これもひとえに全国のボランティアさんの熱いご支援の賜物だと心から感謝しております。

悠久の歴史を刻んだ能登、その歴史が育んだ文化と暮らし、そして自然の営み。能登に昔から伝わることば「能登ややさしや土までも」に象徴されるやさしい風土。能登の祭りで聞いた“オイヤサー”的なかけ声は、まさに“災害に負けないぞ！”と聞こえてきました。災害をきっかけに、能登のやさしさと出会ったボランティアが、1冊のノートに綴ります。

B5版48ページ

定価1500円（税込）

予約受付中!!

発行は2008年3月25日能登半島地震の一年後を目指しています。

ご予約、お問い合わせは被災地NGO協働センターまで!!

編集後記



お問い合わせ先：fudouin@ictv.ne.jp

13年間当センターを支援していただいている埼玉県入間市にある真言宗不動院様が、粘土作家の方によるオリジナルの携帯ストラップを製作、販売されています。この度その中の「鯨ストラップ」(左写真)の売り上げ金を当センターにご寄付いただきました。息の長いご支援をいただきありがとうございます。

この鯨ストラップは不動院に災難除けのご祈願をして地震除けのお守りとして作られたそうですが、ただのお守りではなく「もし、災害に遭ったら、『災害伝言ダイアル171』に電話をかけましょう」と書かれた台紙が入っています。いつも身に付けている携帯電話についている鯨を見ているうちに、災害への備えが身に付くというすばらしいアイディアだなと思いました。

ぞう 通信。

第41号 2007.12.26

発行所：被災地NGO協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel: 078-511-8698 fax: 078-574-0702 http://www.pure.ne.jp/~ngo/

みなさま、いつもご支援いただきありがとうございます。遅れてきた秋はあっという間に終わり、もうすっかり冬の寒さも深まっています。師走の折り何かと忙しい時期かと思いますがお体にはぜひご用心ください。さて、前号で今年発生した能登半島地震、中越沖地震の被災地をつないでいるまけないぞうについてお伝えしました。今号では阪神・淡路大震災で被災されてからずっとまけないぞうを作り続けているベテランの室田洋子さんに今の思いを綴っていただきました。それと合わせて「中越・KOBE足湯隊」のメンバーで足湯ボランティアの活動を続けている武久真大さんの『「被災地をつなぐ」って何だろう』という文章の中からまけないぞうについて書いている部分を抜粋してご紹介します。

いつもあなたの

そばにいます ...

思ひ起こせば、あの恐しい、あの苦しみの中での人の優しさ、助け合いの気持ちは生涯忘ることはあります。その折にNGO協働センターで、まけないぞうの作り方を教わり、手掛けることになりました。今でも少しづつですが作付けさせてもらっています。

可愛いらしい顔が出来、紐をつけて出来上がったのをぶらさげて見て、何処のどなたに使用して頂くのかしら、どんな遠くの地へ行くのかしらと考えながら袋へ納めています。その時は私の心もなごみ、笑みも出できます。

まけないぞうさん、日本の隅々まで行って皆様に愛されて下さい。

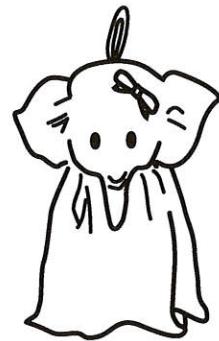
祈つて居ります。

室田洋子

現在、私達が暮らしています神戸は明るくて、モダンで、交通の便も良く、とても住みよい街です。13年前に大震災があったとは到底考えられない美しい街になりました。

思ひ起こせば、あの恐しい、あの苦しみの中での人の優しさ、助け合いの気持ちは生涯忘ることはあります。

その折にNGO協働センターで、まけないぞうの作り方を教わり、手掛けることになりました。今でも少しづつですが作付けさせてもらっています。



ことしもありがとう
らいねんもよろしくね

「ホット君（ちゃん）」とは能登の穴水町に贈られたまけないぞうに出会った地元の方が考え出されたベビー服の手拭いにつけられた名前だそうです。「姿かたちを変えた」ホット君はまけないぞうの弟妹たちといえるかもしれません。

お二人の文章を読んで、まけないぞうを支援して下さる方々、被災地にいる作り手のみなさん、それを被災地に届けにいく人たち、それぞれ一人ひとりの「誰かに伝えたい、つながりたい」という思いがまけないぞうたちにのってバトンを渡し合いながら新しい輪ができていっているように感じました。みなさんはどう思われましたか？

… そういえば、私のかばんについている「まけないぞう」も確かに被災地をつないでいる。KOBE復興のシンボル、まけないぞうが能登の地震で能登の応援にいき、作り方も伝わる。すると今度は能登の穴水で「ホット君」が生まれ、また外へと出ていく。。。シンボルが姿かたちは変えながらも、被災者のこころを乗せつつ拡がっていく。被災者の手から支援者の手へ、支援者の手から被災者の手へと拡がっていく。ひとりひとりがつながりあって、次第に大きなわっかになって。。。そういうものも被災地をつなぐことなのだろう、きっと。とすると、私は能登にまけないぞうを贈りに行って、ホット君を能登でもらってきて。。。もしかして、私もすでにその輪に入れているのかな？ そしたら、なんだか嬉しいことのよう。なんて考えつつも、結局なんだかよくわからない私は、今日もかばんにまけないぞうをつけて、次の派遣を思い浮かべるのでした。

武久真大